

訪問看護ステーションゆりの木

大田原市山の手1丁目1番7号

施設アピール

大田原市内中心地、金灯籠から歩いて1分の商店街に位置し、車を走らせても目に止ります。

「令和3年1月で8年目を迎えることができました。多くの利用者様・ご家族との出逢いがあり、別れもありました。在宅を支援する関係者の方々からも、たくさん学びをいただきました。一人では外出できない利用者様に、少しでも明るい話題や季節の移ろいをお届けし、心地よいケアを、提供していきたいと思えます。」

地域の幅広い層の利用者様に、じっくり向き合う訪問看護は、地域から信頼される存在となることを目指しています。

施設の役割や特徴

退院して在宅生活を送る患者様、地域に潜在している高齢者、独居・高齢者世帯、8050「問題」を抱えた家族、神経難病、小児疾患と幅広く対応・支援しています。またターミナル期の患者様は、第二号被保険者の方も多くいらっしやいます。その中でも難病や小児疾患の方々は、家族のためにレスパイト入院される方がいますが、その結果家庭でのリズムが崩れて体調に変化をきたすことがあります。一日でも早く在宅生活に戻れるように、細やかな支援を心掛けています。

豆知識

訪問看護認定看護師とは

心♥訪問看護認定看護師とは♥
看護師の中でも知識や技術が熟練され、レベルの高い看護が提供できます。患者さんやその家族へのケアもできるうえ、同じ看護師への指導、相談を行う役割も担っています。特定分野の熟練した看護知識と技術が評価される資格なのです。

利用者保険割合
医療保険：4割
介護保険：6割

管理者 三浦知津様
(訪問看護認定看護師)



道端の草や小さな花にも、気配りができる優しい心を持った素敵な看護師さんです。一語一語に、強い意志を感じました。

現場が好きと、インタビュー終了後、次の訪問先に飛んでいきました。

連携している主な医療機関

那須郡市医師会開業医の先生方と、満遍なく繋がっています。先生方とも密に連携して信頼を得られるように心掛けています。

ケアマネジャーとの連携でちょっと気になったこと

本当に稀ではありますが、ケアマネジャーとの連携が困難な場合もあります。

要支援状態でしたが、家族から緊急時の訪問の希望があり、必要性と意向を伝えましたが、ケアマネジャーからは訪問看護の必要性はないと言われました。その後、要介護状態となつてから依頼があり介入了しましたが、事前情報がなく施設入所希望だったようで、突然支援終了となりました。

在宅生活は本人だけではなく、家族も不安を抱えて介護されている方も少なくありません。本人の意向、家族の意向も傾聴して、サービスを提案していただ

ケアマネジャーに期待すること

訪問看護の利用料について、利用票・別表で事前説明をしていただけると助かります。

訪問看護師側から利用の相談しても保留になっていることがあります。その理由を聞かせていただければと思います。

ケアプランについて家族から質問されることがあります。一度の説明では理解できない方もいらっしゃると思います。それが家族の不満となつて返ってくることもあります。関わっていく中で質問できる環境づくりを、一緒に築いていきたいですね。

インタビュー後・・・
訪問看護師は一人一人に向き合う看護ができます。看護師としての役割や必要性を感じることがあります。そんな時に、これまで以上に看護へ尽くすことができるようになるのが、魅力なのではないでしょうか。



みごとに咲いたゆりの木の花です

ロゴマーク

ゆりの木は、もくれん科の落葉高木です。
チューリップの様な花をつけることから別名チューリップツリーとも呼ばれます。



ゆりの木は5月中旬に、大木になった木の上の方に咲きます。

花言葉は

幸福

田園の幸福

見事な美しさ

田園都市の大田原市にはふさわしいのかな？

その地域に暮らす人々の、

生活支援に寄り添う

訪問看護師の皆さんに、

幸あれと願います。

豆記者

関わった事例で心に残ったこと

Aさんは、百歳を目の前に娘さん夫婦に見守られて、その長い人生の幕を閉じました。

Aさんは、都会で生まれ育ち、所帯を持ち様々な苦勞を乗り越え、晩年認知症になってからは、娘さん夫婦に引き取られ一緒に暮らししていました。簡単な言葉を話すことはできたけれど、会話は難しい状態でした。デイサービスやショートステイを利用したり、体調を崩して入院したりしながら、徐々に体は弱っていきました。

娘さん夫婦は、歩くことや食べることが難しくなったら、介護はできないので、施設か病院へと思っていました。

Aさんは、話しかけると素敵な笑顔で「あはは」と応えてくれるチャイミングな方でした。介護をしながら娘さん夫婦は考えていました。「コロナ禍の状況でもし入院したら会えなくなる、なんの対話もないまま母親の人生が終わってしまうなんて考えられない」と食べることが難しくなると、飲み込む力が弱くなってきたある日、喉の奥に痰がたまり、ゼロゼロと呼吸が苦しうになりました。娘さんは訪問看護師に思いを伝えました。訪問看護師は娘さんの心情を察し、共感し、どんなサポートが出来るか具体的に説明し、最期まで責任をもって支援することを約束しました。

訪問看護師は、在宅医へ娘さん

夫婦の意向を伝え、在宅看取りを踏まえてサポートすることで確認し合いました。

その翌日、Aさんは、認知症が治ったかのように娘さん夫婦と笑顔で対話し、晩年一緒に暮らし、ことを良かったかを娘さんが問うと、「うん」としつかり頷き、手を伸ばして娘さんの頬を撫でたのだそうでした。

その数時間後、Aさんは娘さんが枕元で見守る中、ろうそくの火がスーと消えるように息を引き取りました。亡くなる前の束の間のAさんとの対話を、娘さん夫婦は「お別れ」だったと話してくださいました。

ちゃんとお互いを認識し、人生が終わる前に確認したいことを確認し、笑顔でお別れができ、しかもAさんが最期に、母親として娘の頬を撫でて人生の幕引きをしたのです。

人は生きてきたように亡くなっていくと聞いたことがあります。本当にそうだったように感じられました。

娘さん夫婦は、「後悔することはない」と涙を浮かべて訪問看護師に感謝の言葉をくださいました。体をきれいに整え、死化粧をして、生前約束していた着物を掛けたAさんは、とても安らかなお顔でした。

介護する家族の生き方そのものも、看取りにつながることを実感することができ、心に深く残りました。

ゆりの木通信より抜粋

人生の最期の願いは人それぞれ。大切な人との思い出の場所に行きたい。ずっと会いたかった人に会いたい。家族の絆を取り戻したい。自分が生きてきた価値を確かめたいなど、人の人生の数だけ最期の願いはあるのです。

人生の終末期を自宅で過ごし、住み慣れた我が家で人生の幕を降ろすことが、簡単なことではなく、むしろ難しいのはなぜでしょうか。「在宅看取り」という言葉が、まだまだ一人歩きしているのを感じます。在宅医療従事者と介護の専門職が、確かな技術と知恵と思いやりをもって、弱っている対象者とその家族を支え続けて、日々の暮らしを援助したその先に、平穏な看取りがあるのだと思います。



ほっこりとする雰囲気のスーション入口です